元稹「連昌宮詞」考

長谷川眞史

中唐の詩人元稹の樂府制作は杜甫を模範とする所が大きい。元稹の樂府作品中での最長篇「連昌宮詞」[1]（『元稹集』卷二十四）は全て七言で、杜甫の歌行の様式を採用している。とりわけ、「宮邊の老人」なる人物が登場し、かつての榮華を物語るという設定は、言うまでもなく「少陵の野老」[2]が曲江のほとりを訪れ、玄宗・楊貴妃の往事を語った杜甫の「哀江頭」の構成を踏襲するものである。

少陵野老呑聲哭　少陵の野老　聲を呑みて哭す
春日潛行曲江曲　春日　潛かに行く曲江の曲
江頭宮殿鎖千門　江頭の宮殿　千門を鎖ざし
細柳新蒲爲誰綠　細柳新蒲　誰が爲にか綠ならん
憶昔霓旌下南苑　憶ふ昔　霓旌　南苑に下りしとき
苑中萬物生顏色　苑中の萬物　顏色を生ず
昭陽殿裏第一人　昭陽殿裏　第一の人
同輦隨君侍君側　同輦して君に隨ひて君側に侍す

（『杜詩詳註』卷四、「哀江頭」冒頭八句）

曲江を一人ひそかに歩む「少陵の野老」は、閑散とした宮苑の中で玄宗の專寵を得た楊貴妃の姿を追憶している。この「少陵の野老」は作者杜甫の分身であることはもちろん、かつての都の繁榮を知る所謂「天寶の遺民」[3]である。

元稹は未だ普遍的な地位を確立していなかった杜甫に對して、當時の文人の中でもいち早くこれを評價し、尊崇を寄せていた。例えば、元和八年（八一三）江陵左遷中の元稹は、同地に配流されていた杜甫の孫嗣業に會い、杜甫のために「唐檢校工部員外郎杜君墓係銘幷序」（『元稹集』卷五十六）を書き記した。また、元稹が杜甫詩にはじめて接したのはこれよりも早く、現存する元稹の作品中で最も制作年が早い少年時代の力作「代曲江老人百韻」には、既に杜甫の影響が認められる。五言一百韻一千字に亘る長篇詩は杜甫に始まるとされる。また、ここに登場する「曲江の老人」は上述の「少陵の野老」に模したものであると言える。

何事花前泣　何事か花前に泣く
曾逢舊日春　曾ち舊日の春に逢へばなり
先皇初在鎬　先皇初め鎬に在りしとき
賤子正遊秦　賤子も正に秦に遊ぶ

（『元稹集』卷十、「代曲江老人百韻」冒頭四句）

このように聞き手（元稹）が老人に問いかけ、それに老人が答えるという形式は、後に「連昌宮詞」にも踏襲されるものである。そして、詩歌はこの老人の回想によって展開されていくのである。

元和年間以降も元稹の作品には「天寶の遺民」がしばしば登場する。例えば、「行宮」詩は、元和四年（八〇九）、監察御史であった頃の作で、ここに「白頭の宮女」が登場する

寥落古行宮　寥落たり古行宮
宮花寂寞紅　宮花　寂寞として紅なり
白頭宮女在　白頭の宮女在り
閒坐說玄宗　閒坐して玄宗を說く

（『元稹集』卷十四「行宮」）

ここに現れる宮女は寵愛を失って冷宮に左遷され、遂に皇帝の行幸が無いまま白髮の老女となってしまう。玄宗皇帝の盛時を語る老宮女は、いわば過ぎ去った時代を知る生き證人なのである。

このような人物は、元稹が李紳・白居易らと共に唱和した新題樂府「上陽白髮人」[5]と同樣の存在である。白居易「上陽白髮人」の題下注に「天寶五載已後、楊貴妃專寵、後宮人無復進幸矣。六宮有美色者、輒置別所、上陽是其一也。貞元中尚存焉。（天寶五載已後、楊貴妃　寵を專らにし、後宮の人　復た進幸する無し。六宮の美色有る者は、輒ち別所に置かれ、上陽は是れ其の一なり。貞元中尚ほ存せり。）」とあり、このような老宮女は當時實在していたと考えられる。

ただし、元稹や白居易が實際にこうした老宮女に接觸して取材することができたとは考えにくく、やはりその多くの部分が詩人の想像によって形作られていることは否定できない。しかし、杜甫に最大級の尊崇を寄せていた元稹にあっては、上述の「少陵の野老」がこうした人物の祖形となっているのである。元稹が杜甫に對して異常なまでの愛着を示したのは、「天寶の遺民」や彼らが登場する荒廢した宮殿、玄宗朝の物語への強い關心に據るものであろう。そして、それは元稹の王族の末裔[6]としての自負と過去の榮光に對する憧憬とに起因すると考えられる。こうした意識に支えられ、元稹は積極的に政治に關わろうとした。元稹の樂府創作もその方法のひとつであると言える。

元稹の樂府制作は憲宗元和年間（八〇六～八二〇）に集中している。元和四年（八〇九）、監察御史の時、新進氣鋭の元稹は、杜甫の古題に據らない樂府創作に影響を受け、これに共鳴した李紳・白居易らと共に「新題樂府」十二首（『元稹集』卷二十四）を唱和している。また、元和十二年（八一七）、通州司馬であった頃、二度の左遷を經驗して絶望の淵に立たされていた元稹は劉猛・李餘ら二人の若き進士と「樂府古題」十九首（『元稹集』卷二十三）を唱和している。そして、元和十五年（八二〇）五月に發表された「連昌宮詞」は杜甫を出發點として李紳・白居易らとの唱和や「樂府古題」の制作を經て長年に亘り構想された、いわば元稹の樂府創作の集大成であると言える。

本稿は、元稹「連昌宮詞」の成立背景に關して從來は十分に議論が盡くされていなかった諸問題を考察し、その文學史上における意義を問い直すものである。

一　玄宗朝の榮華の生き證人

連昌宮は唐高宗が顯慶三年（六五八）に建立した洛陽郊外の離宮である。その地は河南郡壽安縣（今の河南省宜陽縣三鄉鎮）に位置している[7]。しかし、史書において皇帝自らが連昌宮へ行幸したとする記錄は、玄宗を含むいずれの歷代皇帝にも見られない。

元稹「連昌宮詞」は、白居易の「長恨歌」と雙璧を成す唐代樂府の名作である。或いは諷諭詩としては、「長恨歌」より優れた作品として高く評價されている。[8] この二作品は、いずれも玄宗と楊貴妃の故事を詠じる點で共通する。

しかし、「長恨歌」が專ら玄宗と楊貴妃との悲戀の顚末を追うのに對して、「連昌宮詞」はその舞臺としての連昌宮に描寫の焦點を絞って敍述を展開している。また、「長恨歌」は共有化された第三人稱視點から物語が敍述されている。世間には廣く愛誦されていたものの、白居易自身はその價値を重視しておらず、娛樂作品としての側面が强い。一方、「連昌宮詞」では、まず主人公（元稹）の第一人稱視點が設定されており、老人の語りという形式によって客體化された場面設定の中で敍述が展開される。また、後半部分に當時の政治狀況を背景とした訓戒がはっきりと示されていることから、諷諭詩としての機能を明確化しようとする意圖が見える。[9]

以下、「連昌宮詞」本文を掲げ、內容に分析を加える。「連昌宮詞」は七言九十句六三〇字から成る長篇の作品である。本稿ではこれを內容面から大きく六段落に分けて示す。

1 連昌宮中滿宮竹　連昌宮中　滿宮の竹
歲久無人森似束　歲久しくして人無く森として束ぬるが似し
又有牆頭千葉桃　又牆頭に千葉桃有り
風動落花紅蔌蔌　風は落花を動かして紅蔌蔌たり
5 宮邊老人爲予泣　宮邊の老人　予が爲に泣く
小年進食曾因入　小年　食を進めて曾て因りて入る
上皇正在望仙樓　上皇　正に望仙樓に在り
太眞同憑欄干立　太眞　同に欄干に憑りて立つ
樓上樓前盡珠翠　樓上樓前　盡く珠翠にして
10 炫轉熒煌照天地　炫轉熒煌として天地を照らす
歸來如夢復如痴　歸り來れば夢の如く復た痴の如し
何暇備言宮裏事　何の暇ありてか備さに宮裏の事を言はん

（「連昌宮詞」第一段・第1句から第12句）

時は暮春。荒れ果てて人影の見えない宮殿內に竹が生い茂っている。垣根の「千葉桃」は既に花びらを落として風に舞っている。そして、第五句に現れる「宮邊の老人」は少年時代に食物を供するために離宮に立ち入った際に、「望仙樓[10]」で寄り添う「上皇（玄宗）」と「太眞（楊貴妃）」の姿を目擊している。「望仙樓」の煌びやかな樣は目も眩むばかりで、夢見心地であったため、すぐには離宮での出來事は語り盡せないが、と前置きをしつつ、「宮邊の老人」はかつての連昌宮の榮華を語り始めるのである。

しかし、玄宗が楊貴妃を伴って連昌宮を訪れたとする記錄は見えない。そもそも、連昌宮は天子が行幸の目的地とするような宮殿施設であったとは考えにくい。むしろ長安から洛陽への行幸の際の中繼地點として利用されていた可能性が高い。高宗および玄宗の開元年間に洛陽に行幸した事が史書に記錄されている。從って、この時に連昌宮を利用した可能性は考えられる。また、北宋の樂史『楊太眞外傳[11]』によれば、玄宗は連昌宮の故地である三鄕鎭南邊に橫たわる靈峰女几山において「霓裳羽衣曲」を得たとされている。しかし、「霓裳羽衣曲」は天寶四載七月に女道士であった楊太眞を貴妃として後宮に入內させる際に演奏された樂曲である。また、天寶年間以後、玄宗が楊貴妃を伴って東都へ行幸したとする記錄は見られない。そのため、玄宗が楊貴妃と共に連昌宮を訪れた確證は得られない。

從って、連昌宮という舞臺や「宮邊の老人」は架空の設定であると考えるのが妥當であるように思われる。もちろん、韓愈の「和李司勳連昌宮」[12]詩に現れる「宮前の遺老」のような人物が連昌宮に實在していたかもしれない。そして、元稹にも韓愈の作品が傳えられ、その發想に影響を與えたことも十分に考え得る。しかし、元稹自身の經歷の中で實際に連昌宮に赴き、「宮邊の老人」に遭遇したとする記錄は見えない。そもそも「連昌宮詞」後半部分に述べられるような政治論が身元のはっきりしない一介の老人の口から語られるとは考えにくい。從って、「宮邊の老人」の視點は、前半部分において中核となる物語を描寫し、後半部分に述べられる表現意圖を明確化するために設定されたものであると考えられるのである。

では、一體なぜ「連昌宮」を舞臺に設定したのか。その直接的な理由としてやはり韓愈の先行作品「和李司勳連昌宮」詩の影響を無視することはできない。この問題については「連昌宮詞」の制作意圖や成立の時代背景といった觀點からも併せて議論が爲されるべきである。しかし、從來の研究では、これらの點について十分に議論が盡くされているとは言い難い。この問題については後の章で觸れる。

さて、「連昌宮詞」において、かつての榮華はどのように語られているのか。「宮邊の老人」は、開元天寶の榮華の具體例として、寒食節のエピソードを回想している。ここには、歌唱や樂器の演奏を得意とする樂人が次々に現れ、音樂に關する故事が敍述されている。

13初過寒食一百六　　初めて過ぐ　寒食一百六
　店舍無煙宮樹綠　　店舍　煙無く　宮樹綠なり
15夜半月高弦索鳴　　夜半　月高くして弦索鳴り
　賀老琵琶定場屋　　賀老の琵琶　場屋を定む
　力士傳呼覓念奴　　力士傳呼して念奴を覓め
　念奴潛伴諸郎宿　　念奴潛かに諸郎の宿るに伴す
　須臾覓得又連催　　須臾にして覓め得たるも又連りに催がし
20特敕街中許然燭　　特に敕して街中　燭を然やすを許さる
　春嬌滿眼睡紅綃　　春嬌滿眼　紅綃に睡り
　掠削雲鬟旋裝束　　雲鬟を掠削して旋ち裝束す
　飛上九天歌一聲　　九天に飛上し　歌ふこと一聲
　二十五郎吹管逐　　二十五郎　管を吹きて逐ふ
25逡巡大遍涼州徹　　逡巡　大遍　涼州徹し
　色色龜茲轟錄續　　色色の龜茲　轟として錄續たり
　李謨摩笛傍宮牆　　李謨　笛を摩して宮牆に傍ひ
　偸得新翻數般曲　　偸み得たり新翻數般の曲

（「連昌宮詞」第三段・第13句から第28句）

ここに登場する「賀老（賀懷智）」「念奴」「二十五郎（邠王李承寧）」「李謨」等は、全て音樂に秀でた才人である。玄宗朝の榮華を象徵する物語として、元稹は音樂を主題とした故事を擧げている。玄宗自身、音樂の才能に秀で、作曲や敎坊の指導を行っていたことから、玄宗朝の榮華の象徵として音樂の隆盛は相應しい內容であると言える。また、宦官高力士が登場している點も注目に値する。元稹が彼らについての故事を何處から取材したのかは分からない。しかし、元稹はこの部分に殊更に詳細な自注[13]を附している。

念奴、天寶中名倡、善歌。每歲樓下酺宴、纍日之後、萬衆喧隘。嚴安之・韋黃裳輩闢易而不能禁、衆樂爲之罷奏。玄宗遣高力士大呼於樓上曰、「欲遣念奴唱歌、邠王二十五郎吹小管逐、看人能聽否。」未嘗不悄然奉詔、其爲當時所重也如此。然而玄宗不欲奪俠遊之盛、

未嘗置在宮禁。或歳幸湯泉、時巡東洛、有司潛遣從行而已。
又玄宗於上陽宮夜後按新翻一曲、屬明夕正月十五日、潛遊燈下。忽聞酒樓上有笛奏前夕新曲、大駭之。明日密遣捕捉笛者、詰驗之、自云、「某其夕竊於天津橋玩月、聞宮中度曲、遂於橋柱上插譜記之。臣卽長安少年善笛者李謨也。玄宗異而遣之。

念奴、天寶中の名倡、歌を善くす。毎歳　樓下に酺宴し、纍日の後も、萬衆喧隘たり。嚴安之・韋黄裳の輩闢易として禁ずる能はず、衆樂　之が爲に奏を罷む。玄宗　高力士をして大いに樓上に呼ばしめて曰く、「念奴をして唱歌し、邠王二十五郎をして小管を吹きて逐はしめんと欲す、看る人の能く聽くや否や。」未だ嘗て悄然として詔を奉ぜずんばあらず。其の當時の重んずる所と爲るや此くの如し。然り而して玄宗俠遊の盛を奪はんことを欲せず、未だ嘗て置きて宮禁に在らしめず。或る歳湯泉に幸し、時に東洛を巡る、有司潛かに從行せしむるのみ。又　玄宗　上陽宮に於いて夜後　新翻一曲を按ず、屬ま明夕正月十五日、潛かに燈下に遊ぶ。忽ち酒樓上に笛の前夕の新曲を奏する有るを聞き、大いに之に駭く。明日密かに笛ふく者を捕捉せしめ、之を詰驗するに、自ら云ふ、「某其の夕竊かに天津橋に於いて月を玩で、宮中に曲を度するを聞き、遂に橋柱上に於いて譜を插して之を記す。臣卽ち長安の少年善く笛ふく者李謨なり。」玄宗異として之を遣る。

この自注は主に「念奴」とその伴奏者としての「二十五郎」、そして、「李謨」についての故事を解説するものである。正文中では明確に描寫されていない玄宗皇帝が彼らを甚だ寵愛していたことが分かる。唐王朝、引いては中國史上において特筆すべき隆盛と繁榮とを誇った開元期に音樂を以て重用されたという事實は、その善政の象徴として敍述しておく必要があったと考えられる。

元稹はこのような故事をどのような經路で入手したのであろうか。念奴の故事は後周の王仁裕『開元天寶遺事』にも見える。[14] しかし、その中では玄宗の寵愛の甚だ重きことを敍述しているのみに留まる。楊貴妃が登場しているけれども、高力士や「二十五郎」は登場していない。從って、元稹の注とは別系統の故事であると考えられる。

元稹とほぼ同時代に玄宗・楊貴妃故事を記錄した説話として李德裕『次柳氏舊聞』が擧げられる。『次柳氏舊聞』は、安史の亂以後、左遷された高力士から柳芳が直接取材した逸話を柳芳の息子柳冕に傳え、さらに、柳冕が李德裕の父李吉甫に傳えた故事を李德裕が編んだものという。[15] しかし、高力士から直接取材した記事であるにも關らず、ここには「念奴」の故事は見られない。

「連昌宮詞」において、高力士は正文・注釋ともに、「念奴」を呼び出す重要な役柄として登場している。この故事が柳芳に傳えられなかったとは考えにくい。しかし、事實として『次柳氏舊聞』には「念奴」の記錄が見えない。とすると、さらに別の經路から元稹へと傳わったと見るべきであろう。例えば、白居易は忠州（四川省）で「康叟」に出會っている。彼も所謂「天寶の遺民」である。元稹は通州（四川省）に左遷された經驗があり、同地にあって「康叟」のような人物と接觸し、開元天寶の故事を取材した可能性は大いに考え得る。

以上を要するに、韓愈の先行作品に見える「宮前の遺老」なる存在が「宮邊の老人」の祖形となった。しかし、元稹が實際に「連昌宮」で「宮前の遺老」に接觸して、開元天寶の故事を取材したとは考えにくい。そこには、杜甫の歌行に見えるような「天寶の遺民」が玄宗朝

の生き證人として「宮前の遺老」に投射され、玄宗朝の榮枯盛衰を物語る「宮邊の老人」が形成されたと考えられるのである。

二　「連昌宮詞」の成立時期

「宮邊の老人」の物語は連昌宮の榮華から一轉して安史の亂の破局と連昌宮の衰退とを描寫する。

平明大駕發行宮　平明　大駕　行宮を發し
30萬人歌舞途路中　萬人歌舞す　途路の中
百官隊仗避岐薛　百官の隊仗　岐薛を避け
楊氏諸姨車鬥風　楊氏の諸姨　車は風を鬥はす
明年十月東都破　明年十月　東都破れ
御路猶存祿山過　御路　猶ほ存して祿山過ぐ
35驅令供頓不敢藏　驅令　供頓　敢へて藏さず
萬姓無聲淚潛墮　萬姓　聲無く　淚　潛かに墮つ
兩京定後六七年　兩京　定まりて後　六七年
卻尋家舍行宮前　卻つて家舍を行宮の前に尋ぬ
莊園燒盡有枯井　莊園　燒き盡くされて枯井有り
40行宮門閉樹宛然　行宮　門閉ぢて　樹　宛然たり
爾後相傳六皇帝　爾後　相傳ふ六皇帝
不到離宮門久閉　離宮に到らずして門久しく閉づ
往來年少說長安　往來の年少　長安を說き
玄武樓成花萼廢　玄武樓成りて　花萼　廢せらる

（「連昌宮詞」第三段・第29句から第44句）

玄宗が連昌宮を去り、人々は歌舞を以て見送る。玄宗朝の榮華を象徵する音樂の故事を描寫した前段の餘韻を殘しつつ、「岐薛（岐王李範と薛王李業）」「楊氏諸姨（楊貴妃の姉妹、韓國夫人、虢國夫人、秦國夫人）」らが權勢を振るっていることを述べ、破局の豫兆を暗示する。果たして、天寶十五載（七五六）十月、安史の亂が勃發し、人々は悲しみに包まれた。安史の亂の收束後、「宮邊の老人」が目にしたのは荒れ果てた連昌宮であった。そして、これより後、「六皇帝」の御世に亘って、連昌宮の門扉が開かれることは無かった。

この「六皇帝」は、すなわち、肅、代、德、順、憲、穆宗を指す。ここには大きな問題が存在する。從來の研究において、「連昌宮詞」は元和十三年（八一八）、元稹の通州司馬左遷中の作品との見方が妥當な見解であるとされてきた。[16] しかし、元和十三年（八一八）には、言うまでもなく憲宗はなお健在であり、穆宗は未だ卽位していない。また、後半に現れる「今皇」の語は間違いなく憲宗を指している。そのため、穆宗を「六皇帝」に含むかどうかについては議論が定まっていない。陳寅恪は、「六皇帝」について、「宮邊の老人」の記憶違いか、或いは、元和十五年（八二〇）に「連昌宮詞」が宮中に發表された際に、宦官崔潭峻が穆宗に配慮して改竄されたと推論し、從來の研究では概ねこの說に據っているのである。

現存するテキストにおいてこの部分には異同が存在しない。であれば、我々はこの「六皇帝」という字句によって考察するほかない。そもそも、元稹はこの「連昌宮詞」の讀者として一體誰を想定していたのであろうか。恐らく元稹はもとより新皇帝穆宗李恆を第一の讀者に想定し、自ら配慮して「六皇帝」と作っていたのではあるまいか。

「連昌宮詞」は、元和末期、相次ぐ節度使の叛亂が收束に向かい、ともすれば唐王朝の中興が達成されるか、という世相の中で成立した。そして、元和十五年（八二〇）正月庚子（十八日）、憲宗がにわか

に崩御し、間もなく同月丙午（二十四日）、穆宗が卽位する。さらに同年、宦官崔潭峻が宮中に「連昌宮詞」を奉り、穆宗がこれを嘉すると、元稹は中央政界に復歸することになる。

穆宗皇帝在東宮、有妃嬪左右嘗誦稹歌詩以爲樂曲者、知稹所爲、嘗稱其善、宮中呼爲元才子。荆南監軍崔潭峻甚禮接稹、不以掾吏遇之、常徵其詩什諷誦之。長慶初、潭峻歸朝、出稹連昌宮辭等百餘篇奏御、穆宗大悅、問稹安在、對曰、「今爲南宮散郎。」卽日轉祠部郎中・知制誥。

穆宗皇帝　東宮に在りしとき、妃嬪左右の嘗て稹の歌詩を誦じ以て樂曲を爲る者有り、稹の爲す所と知り、嘗て其の善きを稱し、宮中　呼びて元才子と爲す。荆南監軍崔潭峻甚だ禮して稹に接し、掾吏を以て之を遇せず、常に其の詩什を徵して之を諷誦す。長慶初（筆者注：元和十五年の誤り）、潭峻歸朝し、稹の連昌宮辭等百餘篇を出だして奏御するに、穆宗大いに悅び、稹の安くに在るかを問ふに、對へて曰く、「今　南宮の散郎爲り。」卽日祠部郎中・知制誥に轉ず。

（『舊唐書』卷一百六十六・元稹傳）

この記事に據れば、元稹の歌詩がしばしば東宮にもたらされ、歌唱や樂曲の演奏に供されており、實際上の樂曲性を强く有していたことが分かる。また、元稹は左遷時期から崔潭峻を通じて、穆宗の知る所となっていた。そして、「連昌宮詞」を契機に、穆宗の信任を得ることとなる。『資治通鑑』卷二百四十一・元和十五年の記事によれば、元稹が「祠部郎中・知制誥」に轉任したのは「夏五月庚戌（十日）」とされている。つまり、「連昌宮詞」の發表は元和十五年五月十日ということになる。從って、「連昌宮詞」は穆宗が卽位した元和十五年正月から五月十日までの間に成立したため、「六皇帝」に作ったと考えられるのである。なお、この年は改元されておらず、「今皇」の語とも矛盾しない。さらに踏み込んで考えれば、冒頭四句の暮春の情景から、「連昌宮詞」の成立は元和十五年三月と特定できる。

さて、「宮邊の老人」の語りは廢墟と化した連昌宮の描寫へと移る。その視點は、安史の亂による玄宗朝の破局から「六皇帝」を經た、「現在」の連昌宮へと向けられる。

45 去年敕使因斫竹　偶値門開暫相逐
荆榛櫛比塞池塘　狐兎驕痴緣樹木
舞榭欹傾基尙在
50 文窗窈窕紗猶綠　塵埋粉壁舊花鈿
烏啄風箏碎珠玉　上皇偏愛臨砌花
依然御榻臨階斜
55 蛇出燕巢盤門栱　菌生香案正當衙
寢殿相連端正樓　太眞梳洗樓上頭
晨光未出簾影黑
60 至今反挂珊瑚鉤　指似傍人因慟哭
卻出宮門淚相續

去年　敕使あり　竹を斫るに因りて
偶ま門の開くに値ひて暫く相逐ふ
荆榛櫛のごとく比びて池塘を塞ぎ
狐兎驕痴にして樹木に緣る
舞榭　欹傾して基　尙ほ在り
文窗　窈窕として紗　猶ほ綠なり
塵は粉壁を埋めて花鈿を舊くし
烏は風箏を啄みて珠玉を碎く
上皇偏へに砌に臨む花を愛し
依然として御榻　階に臨みて斜めなり
蛇は燕巢を出でて門栱に盤まり
菌は香案に生じて正に衙に當る
寢殿　端正樓に相連なり
太眞　樓の上頭に梳洗す
晨光　未だ出でずして簾影は黑く
至今　反さまに挂く　珊瑚の鉤
指さして傍人に似し　因りて慟哭し
卻きて宮門を出づるも　淚　相續く

自從此後還閉門　此れより後　還た門を閉ざし
夜夜狐狸上門屋　夜夜　狐狸　門屋に上る
（「連昌宮詞」第四段・第45句から第64句）

「宮邊の老人」は久しく門の開くことが無かった連昌宮に再び足を踏み入れた。そこにはいばらやはしばみが繁茂し、狐や兎が我が物顔で跋扈していた。かつての遺構がわずかに存しているものの、宮殿内には埃が溜まり、鳥が侵入して風鈴を突いている荒廃ぶりである。

そして、嘗て玄宗が愛した敷石のそばの花や長椅子を見て、舊時に想いを馳せている。しかし、梁には蛇がわだかまり、天子の座所には茸が蔓延っている。寢所とつながっている端正樓では、嘗て髪を梳っていた楊貴妃の姿を幻視している。

ここに現れる「端正樓」は、とりもなおさず華清宮の樓閣の名稱である。[17] 讀者はここに至ってようやく冒頭の「望仙樓」と併せて一連の連昌宮の描寫が實は華清宮のものであるとの確信を得るのである。では、このようにはっきりと實態が華清宮であると判斷できるように敍述しつつ、なぜ敢えて「華清宮詞」ではなく「連昌宮詞」と題したのであろうか。華清宮への行幸は玄宗朝の榮華の象徴であると同時に、その後の破局を豫感させる凶兆でもあった。そのため、これを避けるのは當然と言える。

また、元和年間において長安洛陽間の行宮は行幸が途絶えており、華清宮もその例外では無かった。華清宮も連昌宮と同様に狐狸や蛇が住み、雜木や茸が繁茂し、荒廢を極めていたであろう。「現在」の華清宮はもはや御幸に堪えるものではなく、さながら幽靈屋敷の如き廢墟と化していたのである。[18]

元和年間に憲宗が離宮への行幸を一切していないという事實は國家財政の觀點から見れば、むしろ稱揚すべき事實である。元稹としても行宮が荒廢している事態を問題視しているわけではない。しかし、穆宗は「連昌宮詞」を受けて、廢墟と化した華清宮への御幸を切望し、これを敢行した。これは元稹にとって憂慮すべき不測の事態であったと考えられる。

三　「連昌宮詞」の制作意圖

樂府という文學樣式を採用する以上、必然的に表現機能として樂曲への連想が作用することは避けられない。そのため、恐らく「連昌宮詞」も樂曲を伴うことを期待して制作されたであろうし、また、前掲の『舊唐書』の記述を見る限り、實際に樂曲を伴って演奏歌唱されたであろうと考えられる。從って、建前として樂曲性を期待するまでに留まった「新題樂府」や「樂府古題」と比べて、より具體的な樂曲性を有した點で大きな展開を見せたと言える。また、前半部分に見える玄宗・楊貴妃故事の物語性や歌曲としての娯樂性という點で、流行歌として一世を風靡した白居易の「長恨歌」と雙璧を成す要素を十分に有していると言える。その一方で、後世において諷諭詩として側面が高く評價されているように、「連昌宮詞」では後半部分においてその表現意圖が明確に示されており、爲政者に對する訓戒という政治的要素を強く押し出している。

「連昌宮詞」の後半部分冒頭では場面が一旦切り替わり、話者である「宮邊の老人」と聞き手である「我（元稹）」とが向き合う「今」を映している。そして、聞き手は「宮邊の老人」の物語を受けて、玄宗朝の隆盛と混亂とが何者によってもたらされたものであったかを問う。それでは、改めて老人の政治論を檢討してみよう。

65我聞此語心骨悲　我　此の語を聞きて心骨悲しみ
太平誰致亂者誰　太平誰か致し　亂す者は誰ぞと
翁言野父何分別　翁言ふ　野父　何の分別かあらん
耳聞眼見爲君說　耳に聞き眼に見しを　君が爲に說かん
姚崇宋璟作相公　姚崇　宋璟　相公と作り
70勸諫上皇言語切　上皇を勸諫して言語切なり
燮理陰陽禾黍豐　陰陽を燮理して禾黍豐かに
調和中外無兵戎　中外を調和して兵戎無し
長官淸平太守好　長官は淸平にして太守好く
揀選皆言由相公　揀選　皆言ふ　相公に由ると
75開元之末姚宋死　開元の末　姚宋死し
朝廷漸漸由妃子　朝廷は漸漸として妃子に由る
祿山宮裏養作兒　祿山は宮裏に養はれて兒と作り
虢國門前鬧如市　虢國の門前は鬧しきこと市の如し
弄權宰相不記名　權を弄せし宰相は名を記えず
80依稀憶得楊與李　依稀として憶え得たり　楊と李とを
廟謨顚倒四海搖　廟謨は顚倒して四海搖らぎ
五十年來作瘡痏　五十年來　瘡痏を作す

（「連昌宮詞」第五段・第65句から第82句）

老人はただ見聞したことのみを話すと前置きした上で、まず玄宗朝の所謂「開元の治」をもたらした人物として、「姚崇」「宋璟」の名を擧げている。この二人は開元期に玄宗を補佐した名宰相であり、直言を以て玄宗に意見することができた。開元期において、國内外がよく治まったのは彼らの政治手腕によるものであると述べる。

では、彼らの死後、天寶期以降の衰退と混亂とは何者によって引き起こされたのか。さらに老人は續ける。まず楊貴妃が玄宗の寵愛を專らにし、安祿山や外戚らが權勢をほしいままにしたことを述べる。そして、宰相職は權貴の專横によって獨占されて國政は亂れ、その後五十年に亘って深い傷跡を殘したのである。

以上のように、玄宗朝の盛衰の要因として玄宗皇帝自身の政務能力ではなく、皇帝を補佐する宰相の役割を重要視していることが分かる。もちろん、楊貴妃や安祿山が混亂の原因であることは事實として觸れているけれども、彼らの責任を追及しているというより、むしろ外戚によって權勢を得た無能な宰相が政治の實權を握っていたことを問題視しているのである。これに續けて、老人は「今」、すなわち元和年間當時の政治についても論評し、これを總括としている。

83今皇神聖丞相明　今皇は神聖にして丞相は明らかに
詔書纔下吳蜀平　詔書纔かに下りて　吳蜀平らぐ
85官軍又取淮西賊　官軍又取る　淮西の賊
此賊亦除天下寧　此の賊も亦た除かれて天下寧んず
年年耕種宮前道　年年　耕種す　宮前の道
今年不遣子孫耕　今年は子孫をして耕さしめず
老翁此意深望幸　老翁此こに意ふ　深く幸を望み
90努力廟謀休用兵　努力して廟謀　兵を用ゐるを休めよ

（「連昌宮詞」第六段・第83句から結第90句）

先述のように「今皇」は憲宗皇帝を指している。加えて「丞相」が極めて有能であることも述べている。その働きにより「吳蜀」、すなわち元和元年（八〇六）西川節度使の劉闢および元和二年（八〇七）鎭海節度使の李錡の叛亂が平定された。さらに今、裴度・韓愈らによって德宗の代からの宿願であった淮西節度使の叛亂の平定も元和十二年

（八一七）に實現し、天下に安寧の時が訪れたと述べる。

淮西節度使吳元濟の討伐は元稹にとっても一大事件であった。當時左遷中の身にあった元稹は「賀誅吳元濟表」（『元稹集』卷三十四）を奉り、「賀裴相公破淮西啓」（『元稹集』外集補遺卷二）を裴度に送って、その偉業を顯彰している。「連昌宮詞」においても、裴度の淮西節度使討伐を顯彰する意圖があったと考えられる。

實際には華清宮を描寫しているにも關わらず、連昌宮を舞臺とした理由には裴度らの淮西節度使討伐が深く關わっている。裴度・韓愈らは先に擧げた「和李司勳連昌宮」詩のほかに、連昌宮の南に横たわる女几山のふもとで戰勝を祈願する詩を多く制作している。[19] この一大契機を前にして唱和された作品群によって、連昌宮という舞臺が注目されたのである。長安洛陽間に數多存在する行宮のうちから、敢えて連昌宮を選擇して樂府題とした理由はそこにある。

しかし、「連昌宮詞」において、裴度を「宰相」、或いは「丞相」として明確に賞贊するのではなく、裴度が率いた「官軍」の功績として稱揚するに留めており、元和初の「丞相」とは位置付けがやや異なる。よって、これまでに述べられているように、王朝の理亂が宰相の政治手腕に左右されるという論理とは別の問題として取り扱われているのである。もちろん、元稹が、あくまで公的な聲明としてではあるが、裴度の功績を認め、顯彰していることは間違いない。しかし、元稹にとって、やはり末尾に見える「兵を用いるを休めよ」という主張こそが最大の論點である。そもそも、元稹はかつて白居易と共に國家財政立て直しの觀點から「銷兵數[20]」を論じており、主戰派の裴度とは政治的主張において眞っ向から對立している。從って、ここでは裴度らの淮西節度使討伐を顯彰することが目的ではない。むしろ元稹はこれを大きな契機として時代が轉換期を迎えることを期待しており、これ以降は賢明な宰相の手によって政治が執り行われるべきだと主張しているのである。

四　「連昌宮詞」と唐穆宗皇帝

穆宗皇帝李恆はこの「連昌宮詞」の內容を受けてか、憲宗が崩御して間もない元和十五年（八二〇）十一月に、臣下の再三の諫止を振り切って華清宮行幸を決行している。

戊午、詔曰、「朕來日暫往華清宮、至暮却還。」御史大夫李絳、常侍崔元略已下伏延英門切諫。上曰、「朕已成行、不煩章疏。」諫官再三論列。……己未、上由複道出城幸華清宮、左右中尉擗仗、六軍諸使、諸王、駙馬千餘人從、至晩還宮。

（元和十五年十一月）戊午、詔して曰く、「朕　來る日　暫らく華清宮に往き、暮に至りて却還せん」と。御史大夫李絳、常侍崔元略已下　延英門に伏して切諫す。上曰く、「朕已に行かんと成す、章疏を煩はせず」と。諫官再三論列す。……己未、上複道由り城を出でて華清宮に幸し、左右中尉擗仗し、六軍諸使、諸王、駙馬千餘人從ひ、晩に至り宮に還る。

（『舊唐書』卷十六・穆宗本紀）

實はこの時に元稹も「兩省供奉官諫駕溫湯狀」（『元稹集』卷三十四）を奉って穆宗を諫止している。[21] 從って、元稹は決して華清宮への行幸を願っているわけではなく、むしろ正反對に財政や人民を壓迫する行動は避けるべきだと考えているのである。なお、華清宮への行幸による財政と勞力の浪費は戒めるべきだという主張は白居易「新樂府」の「驪宮高[22]」（『白氏文集』卷三）にも見られる。

高高驪山上有宮　高高たる驪山　上に宮有り
朱樓紫殿三四重　朱樓紫殿　三四重
遲遲兮春日　遲遲たる春日には
玉甃暖兮溫泉溢　玉甃暖かにして溫泉溢る
嫋嫋兮秋風　嫋嫋たる秋風には
山蟬鳴兮宮樹紅　山蟬鳴きて宮樹紅なり
翠華不來歲月久　翠華來たらずして歲月久しく
牆有衣兮瓦有松　牆に衣有り　瓦に松有り
吾君在位已五載　吾が君　在位　已に五載
何不一幸乎其中　何ぞ一たびも其の中に幸せざる
西去都門幾多地　西に都門を去ること幾多の地ぞ
吾君不遊有深意　吾が君の遊ばざるは深意有り
一人出兮不容易　一人出づれば容易ならず
六宮從兮百司備　六宮從ひて百司備はる
八十一車千萬騎　八十一車　千萬騎
朝有宴飫暮有賜　朝には宴飫有り　暮には賜有り
中人之產數百家　中人の產　數百家
未足充君一日費　未だ君が一日の費に充つるに足らず
吾君修己人不知　吾が君　己を修めて人知らず
不自逸兮不自嬉　自ら逸せず自ら嬉しまず
吾君愛人人不識　吾が君人を愛して人識らず
不傷財兮不傷力　財を傷はず　力を傷はず
驪宮高兮高入雲　驪宮高し　高きこと雲に入る
君之來兮爲一身　君の來たるは一身の爲なり
君之不來兮爲萬人　君の來たらざるは萬人の爲なり

冒頭六句では華清宮の風光明媚な様子が描寫されている。續く第七・八句で、久しく行幸が途絶えて廢墟同然になっていることが述べられる。憲宗皇帝は多大な財政と勞力とを消費しないように華清宮へ行幸しなかった。そして、末尾四句に見えるように國家財政と人民の勞力とを慮って行幸をしない憲宗を贊美している。

このように華清宮行幸に伴う莫大な出費は避けるべきだとする政治主張は元稹・白居易らの共通認識であった。そして、このような根本的理念は「連昌宮詞」制作の基礎となったと考えられる。

「連昌宮詞」の宮殿描寫は決して行幸したいと思わせるようなものではない。確かに末尾に「深く幸を望む」の語があるものの、「子孫をして耕さしめず」に離宮に行幸するような情況は推奨すべきことではなく、やや皮肉めいた語調すら窺える。また、玄宗朝の榮華期の描寫では宮殿内の様子はほとんど見えない。從って、讀者が知り得るのは狐や蛇が跋扈する廢墟と化した華清宮であり、とても行幸を喚起するようなものではない。そもそも、連昌宮自體は天子が行幸の目的地とする程の宮殿施設ではない。

その一方で、元稹は吳元濟討伐によって德宗の代から引き續く叛亂が決着したことを受けて、裴度・韓愈らが戰勝を祈願した連昌宮を終戰の象徵的舞臺として設定した。そして、これを一大轉期として「兵を用ゐるを休め」、以降は賢明な「丞相」の手によって國政が治められるべきだと主張しているのである。

果たして、元稹は自ら宰相となり、己の政治理念を實踐する機會を與えられることになった。しかし、「深く幸を望む」の語を以て穆宗に嘉され、結果として穆宗の華清宮行幸という問題を引き起こすに至ったことは元稹にとっても不本意な結末であったと考えられる。穆宗

は長慶年間に入ってからも、たびたび華清宮へ行幸している。そして、元稹は宰相職を拜したのも束の間、かえって裴度に彈劾されて喧嘩兩成敗のような形で罷免されてしまう。この事件以降に制作された元稹の樂府でその成立が確認できるものは、わずかに「樹上烏」(23)（『元稹集』卷二十六）一首を數えるのみである。左遷の地にあって、もはや元稹には政治的主張を中央に傳える意欲も環境も失われてしまったのであろう。

「連昌宮詞」は、杜甫に對する尊崇、白居易・李紳との「新題樂府」唱和、左遷中における「樂府古題序」の制作、加えて傳奇小說作者としての文才を集大成した元稹最大の樂府作品であると言える。また、洪邁の『容齋隨筆』に見えるような後世の評價が示す通り、元稹「連昌宮詞」は白居易「長恨歌」を強く意識し、且つ諷諭詩としての樂府を集大成した渾身の意欲作であった。そして、親友であり好敵手でもあった白居易に對抗するために、元和十五年という契機に際して大々的に發表しようとしたと考えられる。

そして、「連昌宮詞」は演奏歌唱に直結した音樂的要素や前半部分に見える物語的要素を有している。こうした娯樂性に加え、諷諭詩としての表現意圖を明確化したという點で「長恨歌」を超克することに成功したと言える。中唐の樂府作品において、一度は白居易が大きな地位を占めたものの、常に白居易に對抗意識を抱いていた元稹は「連昌宮詞」によって樂府制作者としての大きな地位を取り戻した。從って、杜甫を原點とする唐代の樂府の潮流において、元稹「連昌宮詞」は白居易「新樂府」を發展させた、もうひとつの完成形として重要な意義を有するのである。

注

（1）本稿に引用する元稹の詩文は、冀勤『元稹集』（中華書局、二〇一〇年修訂版）を定本とし、適宜諸本を參照した。

（2）杜詩にしばしば現れる「杜陵の野老」、あるいは、「少陵の野老」については、川合康三「「杜陵野老」―杜甫の自己認識―」（『中國文人の思考と表現』汲古書院、二〇〇〇年）參照。

（3）「天寶の遺民」がしばしば杜甫や元稹・白居易の詩文中に出現する點について、竹村則行「白居易と天寶の遺民―「贈康叟」詩をめぐって―」（『文學研究』第八十四輯、九州大學文學部、一九八七年）に指摘がある。

（4）題下注に「年十六時作」とある。貞元十年（七九四）の作。

（5）元稹作は『元稹集』卷二十四、白居易作は『白氏文集』卷三。また、「上陽白髮人」の政治的主題と新題樂府の唱和が元稹に及ぼした影響については赤井益久『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）第Ⅲ部第一章「中唐詩壇諷諭詩の系譜」參照。

（6）元稹の出自については、白居易の「元公墓誌銘」（『白氏文集』卷七十）に「後魏昭成皇帝十五代孫也。」とある。その祖先は北魏を建國した鮮卑族の拓跋珪（道武帝）であり、王族の末裔を意味する元氏に改姓した。

（7）同地についての筆者の實地踏査の記錄は、拙稿「元稹「連昌宮詞」故地考」（『中國文學論集』第四十一號、九州大學中國文學會、二〇一二年）を參照。

（8）南宋の洪邁『容齋隨筆』卷十五「連昌宮詞」に「元微之・白樂天、在唐元和長慶間齊名。其賦詠天寶時事連昌宮詞長恨歌、皆膾炙人口、使讀之者情性蕩搖、如身生其時、親見其事、殆未易以優劣論也。然長恨歌不過述明皇追愴貴妃始末、無他激揚、不若連昌詞有監戒規諷之意。（元微之・白樂天は、唐元和長慶の間に在りて名を齊しくす。其の天寶の時事を賦

詠せる「連昌宮詞」「長恨歌」は、皆な人口に膾炙し、之を讀む者をして情性蕩搖たらしめ、身の其の時に生まれ、親しく其の事を見るが如く、殆ど未だ以て優劣の論ずるに易からざるなり。然れども「長恨歌」は明皇の貴妃を追愴するの始末を述ぶるに過ぎず、他に激揚する無く、「連昌宮詞」の監戒規諷の意有るに若かず。)」とある。

(9) 樂府の表現機能については、松浦友久「樂府・新樂府・歌行論—表現機能の異同を中心に—」(『中國詩歌原論』大修館書店、一九八六年)を參照。松浦氏は「樂曲への連想」「視點の三人稱化・場面の客體化」「表現意圖の未完結化」という觀點から、樂府・新樂府・歌行の表現機能を考察している。

(10) 筧文生譯(『中國古典詩集　唐詩　宋詩・宋詞』世界文學大系、筑摩書房、一九六三年)および楊軍『元稹集編年箋注・詩歌卷』(三秦出版社、二〇〇五年)では、「望仙樓」を華清宮の樓閣とする。周相錄『元稹集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年)では、長安城内の望仙樓と解釋するが、合わない。ただし、中唐において、「望仙樓」が必ずしも華清宮の樓閣を想起させるとは限らないという點には注意しておきたい。

(11) 『開元天寶遺事十種』(丁如明輯校、上海古籍出版社、一九八五年)所收。以下に原文を示す。「開元二十二年十一月、歸於壽邸。二十八年十月、玄宗幸溫泉宮。自天寶六載十月、復改爲華清宮。使高力士取楊氏女於壽邸、度爲女道士、號太眞、住内太眞宮。天寶四載七月、册左衞中郎將韋昭訓女配壽邸。是月、於鳳凰園册太眞宮女道士楊氏爲貴妃、半后服用。進見之日、奏「霓裳羽衣曲」。「霓裳羽衣曲」者、是玄宗登三鄉驛、望女几山所作也。(開元二十二年十一月、壽邸に歸す。二十八年十月、玄宗溫泉宮に幸す。天寶六載十月より、復た改めて華清宮と爲す。高力士をして楊氏の女を壽邸に取り、度りて女道士と爲し、太眞と號し、住まわせて太眞宮に内れしむ。天寶四載七月、左衞中郎將韋昭訓の女を册して壽邸に配せしむ。是の月、鳳凰園に於いて太眞宮の女道士楊氏を册して貴妃と爲し、后の服用に半ばせしむ。進見の日、「霓裳羽衣の曲」を奏す。「霓裳羽衣の曲」は、是れ玄宗の三鄉驛に登り、女几山を望みて作る所なり。)」

(12) 『朱文公校昌黎先生文集』卷十(四部叢刊初編所收)。

夾道疏槐出老根　夾道の疏槐　老根を出だし
高甍巨桷壓山原　高甍　巨桷　山原を壓す
宮前遺老來相問　宮前の遺老　來りて相問ふ
今是開元幾葉孫　今は是れ開元　幾葉の孫ぞ

(13) 元稹の自注については赤井益久「自注の文學—『元氏長慶集を中心として』(『中國古典研究』第四十七號、二〇〇二年)を參照。語句の說明・典據を示す「措辭注」は長篇に多く見られ、「これには元稹の新奇な題材への好尙および用語の個性への自覺が伺われ、その理解を促す理由がある」と指摘する。

(14) 原文は以下の通り。「念奴者、有姿色、善歌唱、未常一日離帝左右、每執板當席顧眄。帝謂妃子曰、「此女妖麗、眼色媚人。」每囀聲歌喉、則聲出於朝霞之上、雖鐘鼓笙竽嘈雜而莫能遏。宮妓中帝之鍾愛也。(念奴は、姿色有り、歌唱を善くし、未だ常て一日として帝の左右を離れず、每に板を執り席に當たり顧眄す。帝　妃子に謂ひて曰く、「此の女は妖麗にして眼色人に媚ぶ」と。每に囀聲歌喉あれば、則ち聲は朝霞の上に出で、鐘鼓笙竽の嘈雜と雖も能く遏むる莫し。)」

(15) 『開元天寶遺事十種』所收。柳冕には柳登という名の兄がおり、(『舊唐書』卷一百四十九)。彼は六十歲にして初めて官職に就き、元和年間には大理少卿、刑部侍郎となり、開元以後の詔敕の規格の制定に務め、さらに右庶子に遷り、老いを以て右散騎常侍を授けられて致仕する。長慶二年に沒した時には、齡九十餘に至る長命な人物であった。彼が父柳芳から高力士に直接聞いた故事を傳え聞いていた可能性は非常に高い。

しかし、柳登と元稹とが直接的に交友を持った記録は見られない。柳登は元和末期頃、その晩年に右庶子の官を拜している。右庶子は皇太子の禮教を掌る官職である。元稹の左遷中、宦官崔潭峻の手によってその歌詩が東宮に持ち込まれている。この頃に右庶子の官にあって東宮の教育を務める柳登と元稹とに何らかの接點があった可能性は考えられないであろうか。さらに附言するならば、柳芳は所謂古文運動の草分けであり、子の柳冕も同様に復古主義者であった。恐らく柳登もこの流れを汲んでいたと考えられる。元稹は左遷中に「樂府古題序」と古樂府十九首を制作している。彼は一度は「新題樂府」を唱和し、古題に據らない樂府制作を標榜しており、一見すると矛盾した制作態度のように見える。しかし、元稹は「古」に根差すことで「新意」を喚起し、より鮮烈に諷意を傳えようとしたのである。こうした復古の潮流は、古文の旗手韓愈のみならず、柳登親子（兄弟）らの影響があったのかもしれない。

(16) 「連昌宮詞」の成立年については、洪邁『容齋隨筆』の「元和十二年」とする記述が最も早い。また、陳寅恪『元白詩箋證稿』（初版、嶺南大學文學研究室、一九五〇年。再刊、上海古籍出版社、一九七八年）第三章「連昌宮詞」では「元和十三年暮春」に比定している。いずれも「連昌宮詞」末尾に「宦軍又取淮西賊、此賊亦除天下寧。」とあり、「淮西賊」、すなわち淮西節度使吳元濟の叛亂が平定された時期から推定する。卞孝萱『元稹年譜』（齊魯書社、一九八〇年）や周相錄『元稹年譜新編』（上海古籍出版社、二〇〇四年）をはじめ、近年の研究は概ね陳氏の說に據る。この他に、岡本不二明「白頭翁の嘆き―「東城老父傳」をめぐって―」（『唐宋の小說と社会』（汲古書院、二〇〇三年）は、元稹が洛陽郊外にある連昌宮を實見できた時期であることから「元和四年七月から翌年三月まで元稹洛陽在任中」と推定する。

(17) 『楊太眞外傳』巻下に見える。原文は以下の通り。「上每年冬十月、幸華清宮、常經冬還宮闕、去卽與妃同輦。華清宮有端正樓、卽貴妃梳洗之所。有蓮華湯、卽貴妃澡沐之室。（上　每年冬十月、華清宮に幸し、常に冬を經て宮闕に還り、去りては卽ち妃と同輦す。華清宮に端正樓有り、卽ち貴妃の梳洗の所なり。蓮華湯有り、卽ち貴妃の澡沐の室なり。）」

(18) 中唐において華清宮が零落し、且つ、不吉な場所であるとされていた點については、竹村則行「中晩唐における華清宮の零落」（『楊貴妃文學史研究』研文出版、二〇〇三年）參照。

(19) 例えば、韓愈に「奉和裴相公東征途經女几山下作」詩（『朱文公校昌黎先生文集』巻十）がある。本文を以下に示す。

旗穿曉日雲霞雜　旗は曉日を穿ちて雲霞雜（まじ）り
山倚秋空劍戟明　山は秋空に倚（よ）りて劍戟明らかなり
敢請相公平賊後　敢へて相公に請ふ　賊を平らぐるの後
暫攜諸吏上崢嶸　暫らく諸吏を攜へて崢嶸に上らん

(20) 『白氏文集』巻四十七「策林　四十四　銷兵數」に「去虛就實、則名不詐而用不費也。故臣以爲、銷兵之方、省費之術、或在於此。（虛を去り實に就けば、則ち名は詐（いつ）はらずして用は費やさざるなり。故に臣以（おも）爲へらく、兵を銷（へ）らすの方、費を省くの術、或いは此ここに在り。）」とある。

(21) 狀文に「臣等伏以駕幸溫湯、始自玄宗皇帝。（臣等伏して以（おも）んみるに駕の溫湯に幸するは、玄宗皇帝より始まる。）」とあり、また、「而猶物議喧囂、財力耗頓。數年之外、天下蕭然。（而も猶ほ物議喧囂として、財力耗頓す。數年の外、天下蕭然たり。）」と述べ、玄宗皇帝に華清宮行幸が始まり、これによって財力が消耗し、國家が亂れたことを指摘している。華清宮行幸には莫大な財政を浪費することに加え、行幸のためのインフラを整備するために人々に多大な勞力を强いることを懸念しているのである。また、「況陛下新御寶圖、將行大典、郊天之儀方設、謁陵之禮未遑、遽有溫泉之行、恐失人神之望。（況んや陛下は新たに寶圖を

御し、將に大典を行はんとし、郊天の儀は方に設けられ、謁陵の禮　未だ遑(いとま)あらず、遽(にわ)かに温泉の行有り、恐らくは人神の望を失せん。）」と述べ、憲宗が崩御して間もないこの時期に、華清宮へ行幸することは人心を損なうことになると諫めている。

(22)　『白氏文集』巻三。題序に「美天子重惜人之財力也。（天子の人の財力を重惜するを美(ほ)むるなり。）」とある。

(23)　題下注「癸卯」とあり。長慶三年（八二三）、同州刺史の時の作。